

藤原京右京二条一坊、醍醐環濠の調査

―第192-4・5・6次

1 はじめに

本調査は、橿原市醍醐町における宅地造成、住宅建設にともなう事前調査である。調査地は藤原京右京二条一坊および西一坊大路のほか、中近世以降の醍醐環濠集落として知られており、集落を囲む環濠の一部が残存している。よって、条坊関連遺構の存在とともに中近世の環濠集落に関連する遺構の存在が推定された。

そこで、宅地部分に5ヵ所（第192-4、192-6次調査）、構内道路部分に1ヵ所（第192-5次調査）のトレンチを設定した。第192-4次調査区は東西9m×南北3m、第192-5次調査区は東西3m×南北20m、第192-6次調査区は東西3m×南北5mのトレンチを4ヵ所（その位置により北西区、北東区などと呼ぶ）である。

調査期間は、第192-4次調査は2017年6月5日から14日まで、第192-5次調査および第192-6次調査は、6月19日から7月11日までである。

2 検出遺構

基本層序 各調査区の基本層序は、次の通りである。

第192-4次調査区は、上層から表土（15cm）、近世盛土（25cm）、包含層（15cm）、灰色粘質土（地山）であり、灰色粘質土の上面で遺構を検出した。

第192-5次調査区と第192-6次調査区は、上層から家屋解体にともなう攪乱（30～40cm）、近世盛土（20～40cm）、中世包含層（15cm）、黄灰色粘質～砂質土（地山）であ

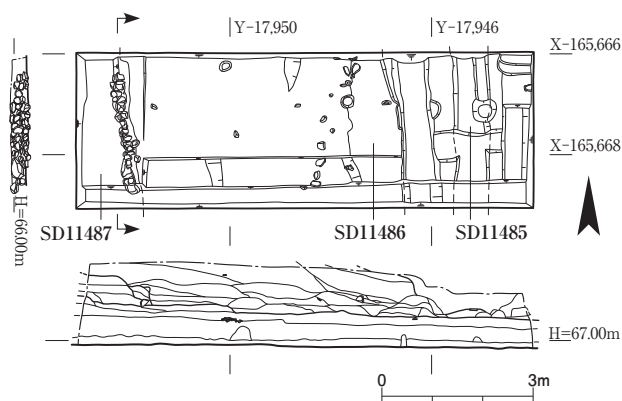


図118 第192-4次調査区遺構図・南壁土層図 1:150

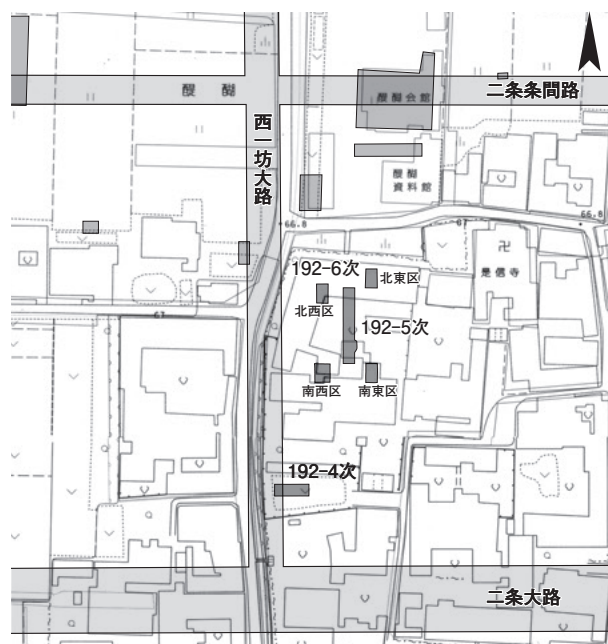


図117 第192-4・5・6次調査区位置図 1:2000

り、黄灰色粘質～砂質土の上面で遺構を検出した。遺構検出面の標高は、調査対象地の南端（第192-4次調査）で66.5m、北に向かいなだらかに傾斜し、北端（第192-6次北東区）で概ね65.0mである。

（山本 崇）

第192-4次調査

溝SD11485 調査区東端で検出した幅70～80cm、深さ15cmの南北溝。調査区外南北に延びる。平安時代の土師器甕、13世紀以降とみられる土師器皿を含む。

溝SD11486 調査区東端から西へ2.5m付近で検出した西に向かう大きな落ち込み。深さは遺構検出面から1.1m以上ある。埋土は褐色～灰黄色の粘質土ないし砂質土、砂からなり、ラミナをとまなう堆積土層の状況から南北方向の流路とみられる。調査時まで残存した濠の位置からみて、醍醐環濠の一部と推測される。最下層に唐津焼碗を含み、上層の埋立土からは17世紀後半の信楽焼播鉢が出土した。



図119 SD11487石積護岸検出状況（西から）

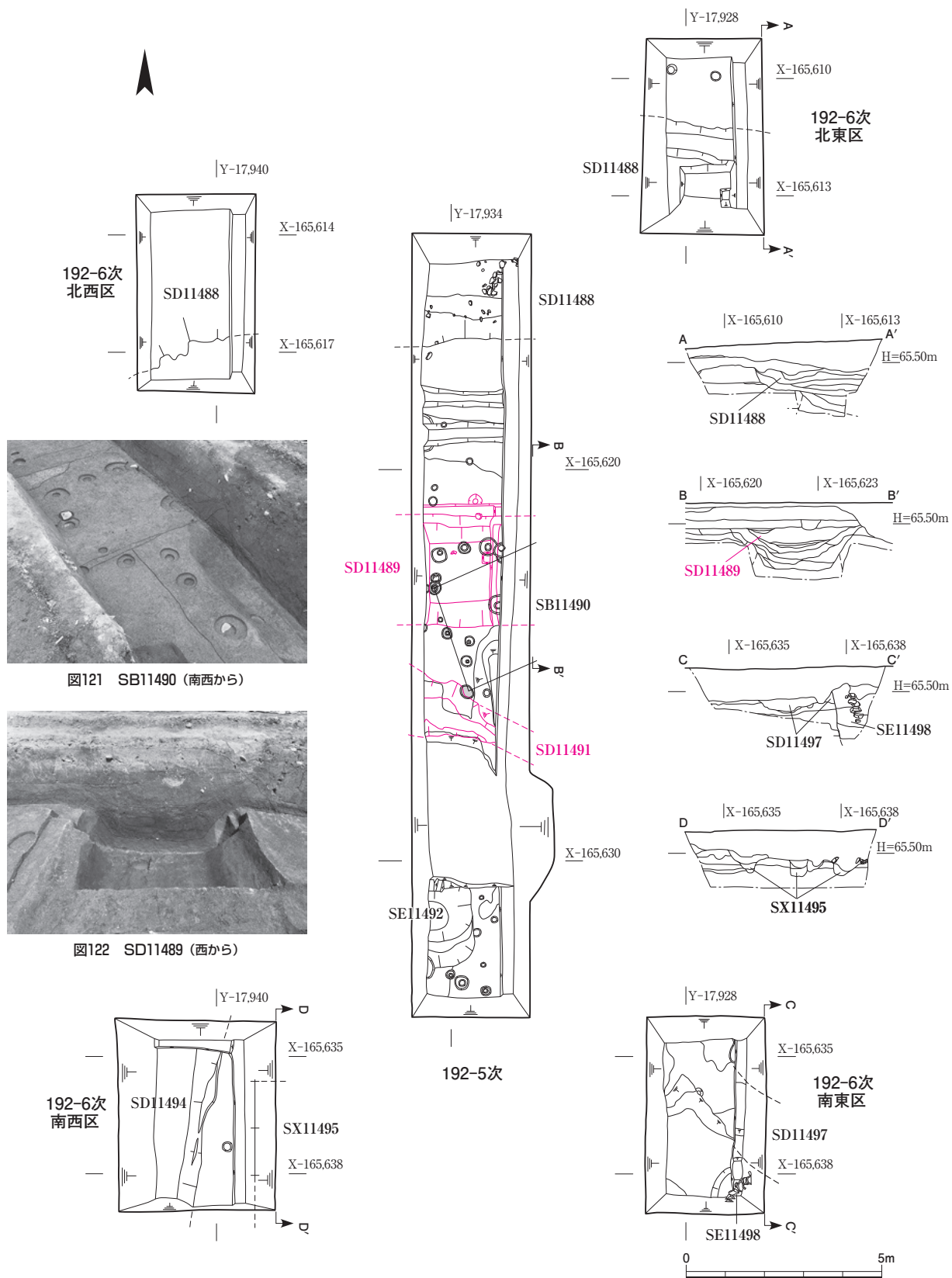


図120 第192-5・6次調査区遺構図・土層図 1 : 150

溝SD11487 SD11486を埋め立てた後、SD11486から西へ5m付近に石積みの護岸を築き、深さ0.6m程度に改変する。埋土は灰黄褐色～灰色の粘質砂で、石積護岸の西側から陶磁器片が出土した。石積護岸は、粘質土を裏込めとして一重に築くもので、敷地西北に調査時まで残存していた濠の擁壁とは異なる。17世紀後半以降に改削された環濠と推測される。

(山本 崇・山本 亮／東京国立博物館)

第192-5次調査

溝SD11488 調査区北端で検出した幅2m以上、深さ1.3m以上の東西溝。調査区外北および東西に延びる。第192-6次調査北東・北西区でも検出した。埋土は、褐色～暗緑灰色の粗砂・砂・粘砂からなる。出土した絵唐津向付の年代観から、埋没時期は17世紀初頭以降とみられる。

溝SD11489 調査区中央で検出した幅3.4m、深さ1.3mの東西溝。調査区外の東西に延びる。埋土は、灰色～暗緑灰色の粗砂・砂および粘土からなる。土師器皿・釜、瓦器碗が出土し、埋没時期は室町時代とみられる。

掘立柱建物SB11490 調査区中央で検出した掘立柱建物。柱穴4基を検出した。桁行1間以上(約2.0m)、梁行2間(約2.9m)の東西棟と考えられ、東で北に振れる。SD11489埋土上面で検出しており、中世末以降に属する。

斜行溝SD11491 調査区中央やや南寄り検出した斜行溝。幅0.5～1.3m、深さは残存遺構面から0.3mで、南東から北西に流れる。埋土は明褐灰色～灰色の粗砂、細砂からなる。弥生時代の土器、石鏃、古墳時代の土師器、須恵器が出土した。第192-6次調査南東区の斜行溝SD11497の延長上にあり、埋土も酷似することから、一連の溝の可能性がある。

井戸SE11492 調査区南端で検出した長辺2.3m以上、短辺1.2m以上の隅丸方形を呈する井戸。井戸枳材とみられる木材や石材などは全く出土しておらず、素掘りの井戸であろう。ほぼ中央に長さ約95cmの竹が垂直に埋まっており、息抜きの竹と推測される。出土した土師器皿・釜の年代観から埋没時期は室町時代とみられる。

第192-6次調査

溝SD11488 北西区および北東区で検出した東西溝。調査区外の東と西へ延びる。第192-5次調査の成果とあわせると、幅5.6m、深さ1.3mの東西溝とみられる。北

西区で検出した南肩は、西で南に広がり、東西方向から南西方向へ曲がる溝の内側の肩にあたる。埋土は褐色～緑灰色の細砂・粘砂・シルトからなる。唐津焼碗が出土し、埋没時期は17世紀以降とみられる。

溝SD11494 南西区で検出した幅2.5m以上、深さ0.9mの南北溝。溝の東肩のみ検出しており、調査区外西に延びる。埋土は黄灰色～灰色の細砂ないしシルト、粘土からなる。土師器鍋・釜、瓦器碗が出土し、埋没時期は室町時代とみられる。

柱穴列SX11495 南西区の東壁面で確認した3基の柱穴。いずれも西端のごく一部のみを確認したもので、最大一辺約50cm、深さ40cm。柱間は4尺等間と推定される。東西棟建物の妻柱列か、南北塀であろう。

斜行溝SD11497 南東区東壁で検出した溝。埋土は褐灰色砂・細砂からなる。南東区はほぼ攪乱により破壊されており、平面や西壁では溝にともなうとみられる砂がわずかに残る程度であった。第192-5次調査のSD11491と一連の溝となる可能性がある。

井戸SE11498 南東区の南東隅壁面で検出した石組井戸。掘方から江戸時代後期以降の信楽焼柿釉壺が出土した。

(山本 崇・張 祐榮／韓国国立慶州文化財研究所)

3 出土遺物

土器・陶磁器

第192-4・5・6次調査をあわせて、整理用木箱に15箱分の土器・陶磁器が出土した(図123)。以下、主要遺構からの出土品について述べる。

SD11486出土土器・陶磁器 土師器皿・釜、瓦器播鉢・釜(3)、焼締陶器甕、施釉陶器播鉢・碗(1)・向付・播鉢(2)、染付磁器碗などが出土した。焼締陶器の甕には、常滑焼・信楽焼・備前焼がある。埋土下層(堆積土)出土品には、土師器皿・釜、瓦器碗など中世の遺物が少なくないが、唐津焼と呼ばれる肥前陶器の灰釉碗(1)やタタキ成形の瓶の存在は、SD11486の埋没年代が16世紀末以降であることを示す。一方、埋土上層(埋立土)からは、17世紀後半頃の信楽焼錆釉播鉢(2)や伊万里焼の俗称で知られる肥前磁器の碗の小片が出土しており、SD11486の意識的な埋め立てが17世紀後半以降におこなわれたことを知りうる。

SD11488出土土器・陶器 須恵器甕、土師器皿(4)・

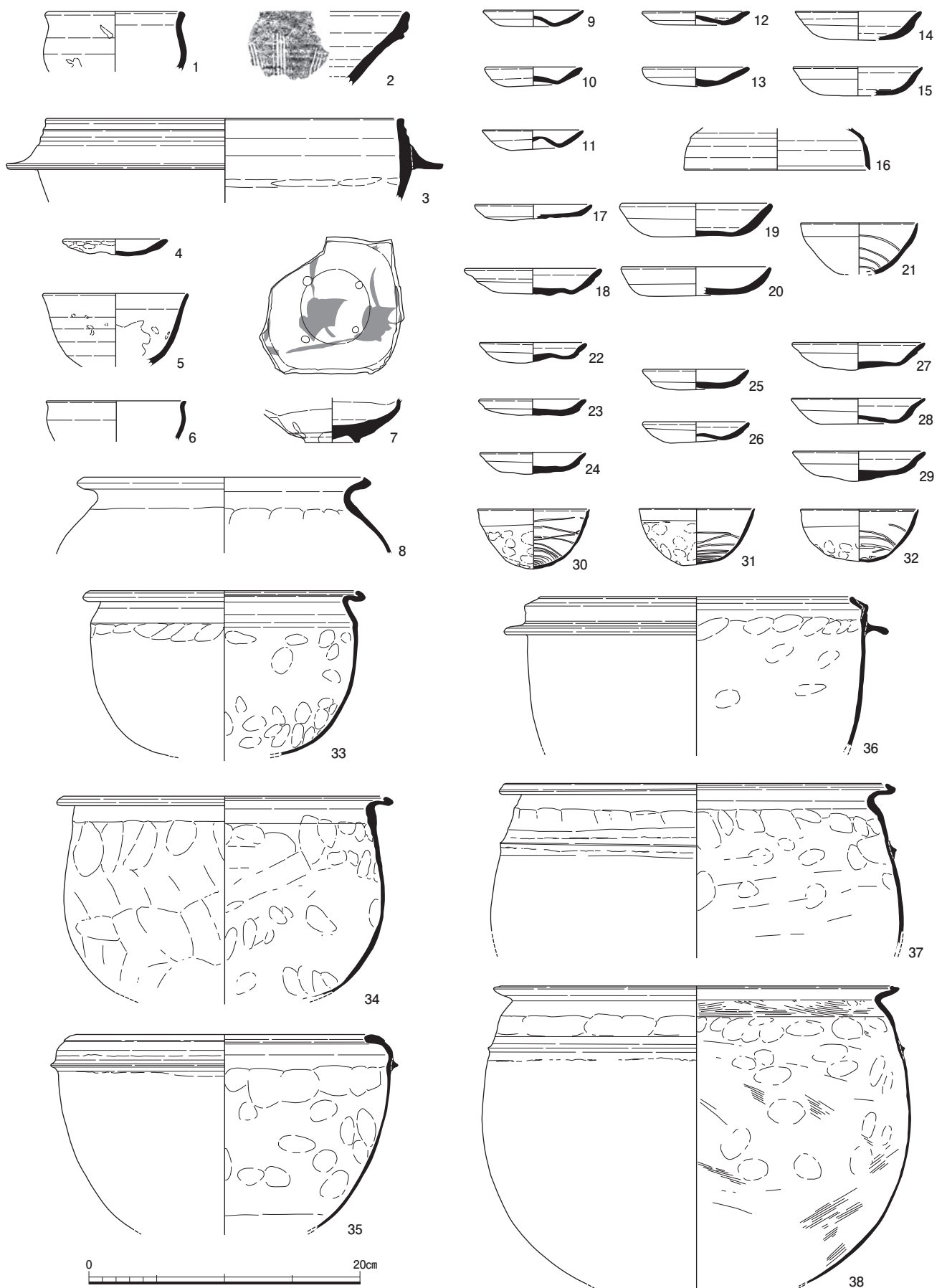


図123 第192-4・5・6次調査出土土器 1 : 4

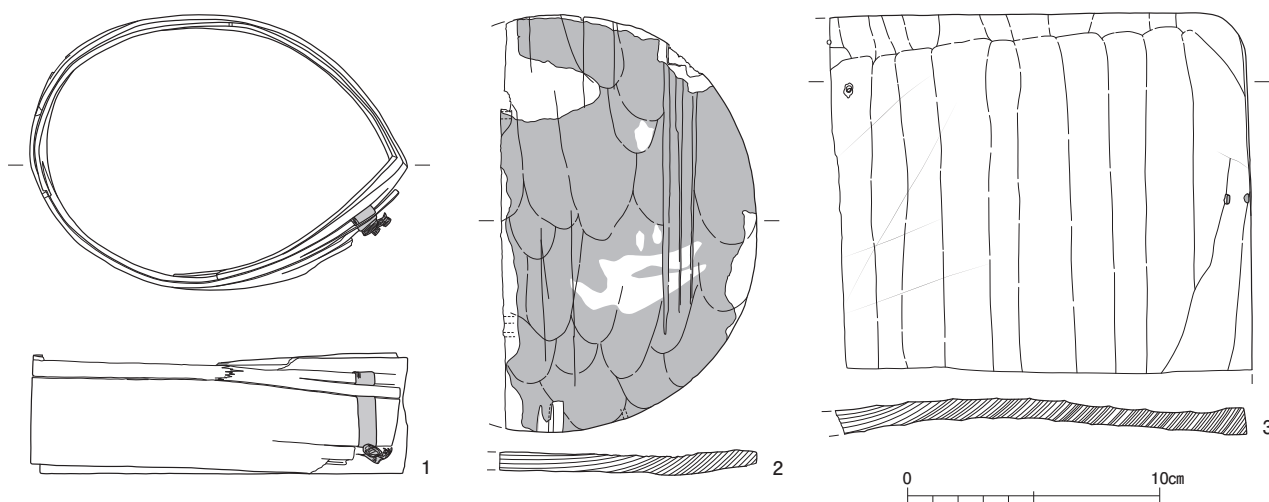


図124 第192-4・5・6次調査出土木製品 1 : 3 (1 : 第192-6次、2 : 第192-4次、3 : 第192-5次)

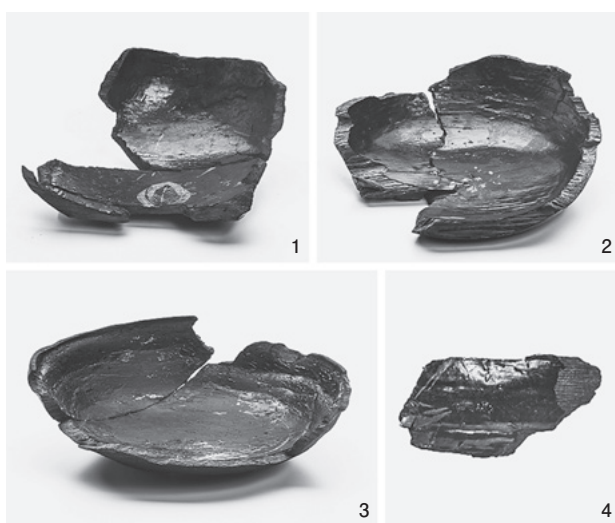


図125 第192-5・6次調査出土漆器 (1・3 : 第192-5次、2・4 : 第192-6次)

釜(8)、瓦器碗・鉢、焼締陶器(備前焼)瓶・施釉陶器碗(5・6)・向付(7)などが出土した。古代・中世の遺物を少なからず含むが、唐津焼碗(5・6)・向付(7)の存在から、SD11488の埋没年代はSD11486とほぼ同時期の16世紀末以降であることがわかる。鉄絵で文様を施した7の内面底部には、胎土目と称する重ね焼きの窯道具痕跡が残る。

SD11489出土土器 須恵器甕、土師器皿(9~15)・釜、瓦器碗・播鉢などが出土した。比較的まとまった量が出土した土師器皿は、『藤原報告V』で報告した藤原京左京六条三坊SE4790出土品(14世紀半ば~後半)と同SD4744・4745・4755出土品(15世紀半ば)の中間的様相を呈することから、14世紀後半ないし15世紀前半頃のものと考えられる。

SD11491出土土器 弥生土器と古墳時代の土師器甕、須恵器杯蓋(16)・甕などが出土した。

SE11492出土土器・陶器 須恵器甕、土師器皿(17~20)・釜、瓦器碗(21)、焼締陶器(常滑焼)甕などが出土した。土師器皿には、やや古相を示すものを含むが、



図126 SD11489出土編みかご片

18・21などSD11494出土品と高い共通性を示す土器の存在から、埋没時期はSD11494とほぼ同時期と考えられる。

SD11494出土土器・陶器 須恵器杯蓋・甕、土師器皿(22~29)・鍋(33・34)・釜(35~38)、瓦器碗(30~32)、焼締陶器(備前焼)瓶などが出土した。土師器皿は、SD11489出土品に似るが、小皿の口径がやや大きい点で古相を示す。

(尾野善裕)

木製品・漆器ほか

木製品(図124) 1は曲物の蓋側板。土圧で歪んでいるが、完形。復元径13.1cm。結合孔は3カ所残存。樺皮綴じは1列、皮幅は約1cm。内面の一部に焼け焦げがある。SD11488下層出土。2は曲物底板。外面に漆を塗布する。結合孔は側面に2カ所、補修孔が破面に2カ所残存。内面には刃痕があり、まな板へ転用か。復元径16.6cm。SD11486出土。3は折敷底板。残存する結合孔は4カ所、このうち2カ所に樺皮が残存。両面の端部1~2cmを厚く残す。片面には刃痕が多数あり、まな板に転用か。SE11492出土。

漆器(図125) 1と2は碗。1は口縁部を欠く。内外

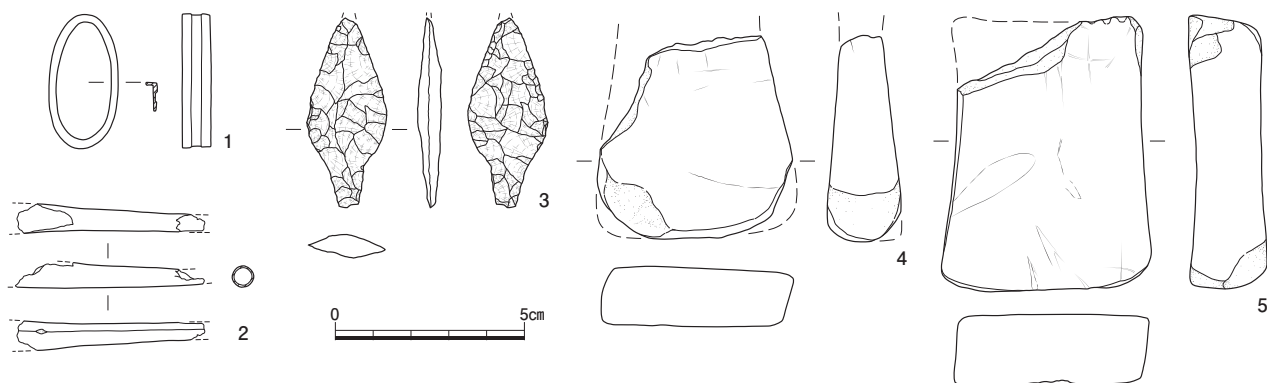


図127 第192-4・5次調査出土金属製品・石器・石製品 1:2 (1・2:第192-4次、3~5:第192-5次)

面とも黒漆塗、内面に草花文様を赤漆で描く。SD11489出土。2も口縁部を欠く。内外面とも黒漆塗、内面に赤漆で草花文様を描く。外面にも赤漆による文様が確認できるが、詳細不明。SD11494出土。3は皿。内外面とも黒漆塗。内面に赤漆で文様を描くが、剥落が激しく詳細不明。器壁は上方に向かって薄くなるが、端部は肥厚する。復元口径15.6cm、高さ4.1cm。SD11489出土。4は漆器片。内面の漆は剥落。外面は黒漆塗、文様を赤漆で描くが、詳細不明。SD11494出土。

編みかご片 (図126) 増し差し菊底編み、あるいは二重菊底編みと呼ばれる編み方で10~12段目までの範囲を3本超、1本潜、2本送で編み、これより外側を1本超、1本潜、1本送で編んでいる。使用している素材の幅はタテ材が1.5cm、ヨコ材が0.1~0.2cm。編みかご片はこのほか9点あり、少なくとも2個体分あると思われる。いずれもSD11489出土。1点を除いてすべてに黒色の物質が内面に付着していた。赤外線分光分析 (FT-IR) を実施したところ、タンパク質の可能性が示されたが、特定にはいたらなかった (分析は田村朋美による)。

このほかSE11492から折敷底板片、曲物底板片、木錘、燃えさが出土した。

金属製品ほか

金属製品 (図127) 1は鞘口金具。横断面は倒卵形。外面には幅0.2~0.3cmの溝がめぐる。鞘口に固定するため、上部0.2cmを直角に折り曲げる。SD11486出土。2は煙管吸口。両端を欠く。補強帯の痕跡がないことから、形態は古泉弘による煙管の変遷案のⅣ期以降に比定できる (古泉弘「日本の初期煙管に関する覚書」『平井尚志先生古稀記念考古学論叢第Ⅱ集』大阪・郵政考古学会、1992)。SD11487出土。

このほか第192-4次調査区包含層から鉄棒、SD11485埋立土から鉄板が出土した。

石器・石製品 (図127) 3は大型の有茎式打製石鏃。サヌカイト製。先端を欠く。鏃身部は深い調整剥離の後、浅い調整剥離を加える。茎部は調整剥離の深さや回数を

変え、作り出す。弥生時代のもの。4.69g。SD11491出土。4、5は蛇紋岩製の砥石。4は上半を欠く。下面以外はいずれも砥面。SE11492出土。5はほぼ完形。下面以外の各面を使用。SD11489出土。 (土橋明梨紗)

瓦磚類 第192-4次調査区から出土した瓦磚類は、丸瓦21点 (19.5kg)、平瓦65点 (69.5kg)、榛原石3点 (13.6kg)である。第192-5次調査区から出土した瓦磚類は、軒丸瓦2点、面戸瓦1点、丸瓦4点 (3.9kg)、平瓦34点 (36.5kg)、第192-6次調査区から出土した瓦磚類は、軒丸瓦2点、丸瓦11点 (16.1kg)、平瓦54点 (67.7kg)で、軒丸瓦はいずれも近世以降の巴文軒丸瓦の小片、丸・平瓦の多くは中・近世ないしそれ以降のものである。 (清野孝之)

動物遺存体 SD11486から、イシガメ科の腹甲の一部 (剣状腹骨板) が出土した。SD11488からは、ニホンジカの寛骨 (右) が出土。寛骨臼の癒合が完了しており、成獣である。 (山崎 健)

4 まとめ

第192-4次調査区に推定されていた西一坊大路は、中世以降に削平を受けており検出できなかった。また第192-5・6次調査においても、攪乱が著しく、明確な藤原京期の遺構は確認していない。古代以前の遺構は、古墳時代までの遺物を含む斜行溝1条を確認したのみである。しかしながら、中世以降近世にいたる複数時期に属する環濠とみられる溝を確認した。埋没時期によると、これらの溝は、内側から外側へ徐々に新しくなる傾向が認められ、そうであるならば、調査時までさらに外側に環濠が残存していたこととも整合的といえる。今回の調査成果は、室町時代から江戸時代にかけての醍醐環濠の変遷がうかがわれるものとして、注目されよう。

加えて、環濠とみられる溝の内側において、素掘井戸、石組井戸、掘立柱建物、溝などを確認した。中世以降の醍醐環濠集落内の様相を把握し、その変遷を解明する上で貴重な成果といえ、今後の調査に手がかりを得たといえる。 (山本 崇)